
時空宅配便

柚乃 詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空宅配便

【Nコード】

N5938S

【作者名】

柚乃 詩音

【あらすじ】

街で噂になっっている過去や未来に荷物を届ける時空宅配便。どこにあるのか、本当にあるのか、よく分からないものの誰もが知っているそのお店が、今日もひっそりと開店します。

開店です

時間というのは、

進めることも

巻き戻すこともできません。

もちろん、止めることも。

ただ一定の速さで進んでいくだけ。

でも、もしも過去や未来に思いを伝えられるなら、

もしも時空を超えて、物品を届けられるのなら、

貴方はどうしますか？

もちろん時の流れに逆らわず行くのもいいでしょう。

でも何か伝えたいこと、わたしたいものはあるのなら

ここにきてみてください。

ここを必要とする人がいるから、

時空宅配便、本日も開業いたします。

噂というのは一定の年齢の間で流れるもので、他の年齢層は知らないことが多いものだ。それでも幅広く老若男女に知られるものだからである。その中にこんなものがある。

町のどこかに過去や未来に手紙や荷物を贈ってくれる宅配屋があるらしい。

この現実味のない噂、何故だか知らない人はいないまでに知れ渡っていて、ありえないことのはずなのに実^{まじ}しやかに囁かれている。

ここに一人、その宅配屋を探す少年がいた。

きよるきよると辺りを見回す大きな瞳が一軒の小さな小屋のような建物を捕らえた。

いつも通る通学路。昨日はこんな建物なかった。

古臭い黄ばんだ外装にはもうほとんど読めないような字で『時空宅配便』と書かれた看板が張り付いている。

「あつた！」

幼い少年は、その純粋な感性によりはつきり言えばボロいといかない見えた目を華麗にスルーして素直に喜んだ。

少年はまだ看板の漢字を読めるほどの間学校に行ってはいないのが、噂に流れている目印の「入り口にある二本足で立つ猫の置物」を見て判断した。

ほとんど中身の入っていないと思われるぺしゃんこの黒い鞆に少し触れ、そしてから中に入るべく足を踏み出した。

中に入ってみると、外装からの予想を裏切ることとはなく埃にまみれた極端に物の少ない空間に出た。外から見たとおりの古さと狭さだった。

置いてあるのは木でできている対の椅子と机、同じく木の本棚、そこから溢れる本の数々、机の上の黄色い花が三輪程活けてある硝子の花瓶にノートと短い鉛筆数本、使われている形跡のない筭と塵取りぐらいなものだ。

文字で表せば多少長いかもしれないが書き出せる程度の物品しかなく、しかもそれらは散逸に置かれている。

「あのーう、誰かいますか」

子供らしい高い声が木に吸収されていく。

「あいよー」

奥のほうからやる気のないけだるそうな声が返ってきた。

ちよつと間をおいて出てきたのは16、7と思しき青年だった。特徴といったものは特になく一時間やそこら経ってしまえば忘れてしまいそうな目鼻立ち、寝癖のついたままの黒髪によれたYシャツと黒いズボンという見た目からしてやる気のなさそうな男だった。でもやはり少年は気にしない。相手が聞いているのか寝ているのか分からないような顔をしているのにも関わらず緊張が帯びた声で健気にも話しかけ続ける。

「こつ、ここは、かこにてがみをとどけてくれるっていうところですか？」

たどたどしい語調が普通なら好感を感じる所なのだが男は面倒くさそうに返事をするだけだ。

「んーまあそんな感じのことやってるケド……」

その言葉を聴くと少年の顔はたちまち緊張から開放されて明るく和らぐ。

「よかった。あつてた。このてがみを三年まえにとどけてください。おねがいします！」

「ごそごそと黒い鞆から水色の封筒を取り出して両手で持ち、ピツと差し出した。

「できなくは無いケド、誰に？」

「え？ あつ、そつか。お母さんにです」

「ふーん。ママなら直接わたせばいいんじゃないの」

すると少年の顔は太陽が沈んだかのごとく暗くなる。どうやら禁句だったらしい。うつむきながらもぼぼそと受け答えをする。

「お母さんは、もういないから」

今にもなく出しそうな顔をしている少年に対して墓穴を掘った本人は事も無げにずげずげとものを言う。

「あー、死んじやった？　じゃあオレの力があるかあー。うん、まあやってあげるよ」

「ほんとうですか」

途端嬉しそうに少年は笑う。まったく、子供というのは単純、基^{もと}純粹で可愛げのある生き物ではないか。この男はそんな彼を泣かしそうになってまで何を考えているんだろうか。それとも血も涙もない冷徹漢なのか？　いや、子の小さな客の以来を追っ払うことなく聞いているのだ。態度がアレなだけで優しい人間なのかもしれない。そうであって欲しい。

「代金は後払いでいいーからネ」

撤回しよう。やはりどうしようもない駄目人間だ。

「あ、はい！」

「じゃあ、ボクの名前はあー？」

「優太です！」

「ん、ゆーた君。オレは彼方^{あなた}さんネ。じゃあお母さんの名前とお家はどこら辺かわかるか？」

終始やる気のないしゃべりの彼だが、一応仕事はきちんとこなすらしい。一通り質問を済ますと少年——優太から手紙を受け取る。

「んじゃあ、依頼承りましたー。完了したら連絡するよ」

「ありがとうございます！」

「それは、依頼が終わったと言うものだよ」

優太が帰った後の店内では彼方が一人手紙を見ていた。

「やー、子供は可愛いね。純粹だ。ママにどうしてもこの手紙を渡して欲しいらしい」

声に答える者はいない。彼方はひらひらと手紙をかざして微笑む。言っている事は皮肉が見え隠れしているが、表情は率直に優太を可愛いと思っているように見える。

「では早速出発といきますか」

手早く店のシャッターを閉じて椅子に座る。肘を突き、瞳を瞑ると花瓶に活けてある花の一輪が花びらを次々と落とす。すると少しだが、理屈はなく空気が変わったような気配を感じる。

もう一度彼方がシャッターを開くとがらりと、というほどではないが現在とは少し違う景色が広がっていた。

今よりも傷や汚れの少ない本屋の壁、道行く学生の持つ携帯は幾つか型の古いものだ。

「おっし、着いたか」

グッ、と両の手を天に伸ばして伸びをする。

「さあーて、ゆーた君のママはどうやって探すかなー？」

彼方は優太から幾つか情報は聞き出していた。例えば、当時優太が通っていた幼稚園の場所。例えば優太が今住んでいる家。

「とりあえず家かあ？」

手早く店を閉めてズボンのポケットに手をつ込み歩き出す。手紙もちやんとポケットの中だ。

時間帯は丁度お昼時。平日らしく人もそんなに多くはない。この時間帯に町に姿を見せるのはママ友とランチにしようというご婦人方がほとんどだ。大概の場合は家で家事に追われる合間に軽く食事を取る程度だろうから、そちらもたいした数ではない。

一般的な幼稚園児のお母さんであるはずの優太の母親は家にいる

確立が高いだろう。

優太の家はよく言えば趣おもむきのある、はつきりいつてしまえば彼方の店と張るボロさだった。

「うつわ、ボロ……」

自分の店を棚に上げて心の声が駄々漏れなのが彼方の彼方たる所ゆ以だ。えん

まったく遠慮の見えない動作で表札を見る。書いてある名前は見るからに老人のものが二つ書いてあるだけだ。

「あつれえ、ゆーた君いないな」。それどころか、ママの名前ばいのもない」

どうやら三年前はここには住んでいなかったらしい。両親どちらかの実家、といった所なんだろう。

「そういえばゆーた君の苗字しらねエや。ママの名前も聞いてない。幼稚園の位置的にこの近辺の家だと思うんだけどな」。やっぱ幼稚園に張り込むか？ 確実に会えるよな。でも、ゆーた君の前で渡すのはやばいかもな」

幼稚園に行くのが一番手取り早いのは確かだ。だが、園の職員に家を聞くのにはそれなりの理由をつけなきゃいけないのが面倒臭い。張り込むと不審者扱いされる可能性がある。それ以前に優太にあつてしまつたらば近々母親が死んでしまうのが知られてしまうかもしれない。

道行く人々に不審そうな目で見られるのも気にせず彼方はぶつぶつと呟いていた。そんな彼でさえ何事だと思つような形相で、一人の女性が走ってきた。

しかもますます今彼方の目の前にある家に向かって走っている。慌てて彼方は電柱の陰に隠れる。電柱なんて人が隠れられるほどの太さはないが、よほど切羽詰っているらしい女性は彼に気づくことはなかった。

女性はインターホンを鳴らすことすらせずに小学生の運動会の応

援の声よりも大きいような声で叫んだ。

「お父さん、お母さん！ 優太が。優太がいなくなっちゃったの！
どうしよう」

3（前書き）

かなり久々です。

もし読んでくれている方がいらっしゃるのなら申し訳なく思います。
こんどこそ、早めにつ！

家からは女性の嗚咽と途切れ途切れの話し声が交互に聞こえてくる。

どうやら優太が幼稚園から抜け出してしまったようだ。

となるとさっきの女性は優太の母親で、ここは彼女に実家と言った所か。

それにしても園から抜け出す園児なんてそうそういることはない。よくよく聞くと先生方が他の園児同士のトラブルに気を取られている間のことだと言う。

しばらくすると家から優太の母親と老夫婦が姿を現した。三人はやはり隠れる彼方かなたには気づかず、に各々違う方向に走っていった。

「あれ？ 今渡すチャンスだったんじゃない……ちょっと、待ってー」

彼方も優太の母親のあとを追うように走り出した。しかし息子の窮地のためか元々彼女は元陸上部か何かで足が速かったのか、割と早いほうである彼方でも差が広がることはなくとも追いつくこともできない。

角を三つほど曲がった頃、次の過度を優太の母親は曲がり一瞬視界から彼女が消える。彼方もその角を曲がると彼女ごしに優太の姿があった。

「優太っ！」

声に気づいた優太が振り返り嬉しそうに走ってくる。

「おかーさん！」

手には粘土の塊が握られていた。

丁度、少し遠くでエンジン音がした。

それは徐々に近づいてくる。

二人は互いに駆け寄っている。それぞれの速さを考えて二人が落ち合うのは……不幸にもきつと車——しかもエンジン音的に大型の——が走ってくる十字路のと真ん中辺りだ。

（う、そだろ。まさか、ゆーた君のママが死んだ日って……まずいっ！）

二人にはエンジン音はまだ聞こえていない。やっと優太が見つかって興奮状態なんだ。

彼方は、気づいても動くことができない。動くことは許されない。彼方が動けば優太の母は助かるかもしれない。でも、そうすると優太が手紙を彼方に持ってきた『いま現在』はなくなる。過去を改竄する事はタブーだ。

後数歩で十字路に差し掛かるあたりで母親のほうで車の存在に気が付いた。

「優太あつ。止まって！」

もう遅い。車は数秒せずに来る。母親は加速し——彼方は見ていられずに目をそれした。

派手なブレーキをかける音がした。

運転席から飛び出してくる運転手。

優太の心が痛くなるような泣き声。

大してかからずに救急車がやってきた。運転手がすばやく連絡したのと、救急車が配置している消防署が近かったためのらしい。

それまで、彼方は一步も動くことができなかった。駆け寄ることぐらいは可能だったが、目の前で事故が起こったのがそれほど彼のショックを与えたのだ。

救急隊員が手際よく優太の母親を救急車に運びこぶ中、隊員の一人に彼方は駆け寄った。さも、今走ってきたかのように。

「あの！ オレ、その二人の親類です。今駆けつけられたの俺だけで。同行させてもらってもいいでしょうか」

嘘をあたかも真のように吐き出す。普段の無気力さも欠片も見られない。そういうところ、彼方は策士だ。もちろん、心中の動揺も感じさせることはない。

（何もできない代わりに、手紙だけは渡さないとな）

救急車内。優太の母親は救急隊員の懸命な応急処置を受けるも所詮は応急処置。彼女の息は細くなるばかりだ。

彼方はその様子を黙って見つめていた。

今の優太の母に他人である彼方が何故一緒に救急車に乗っているのか問う気力などない。彼方の存在に気づいているか？も微妙だ。

——この状態の彼女に優太の手紙を握らせれば『渡した』ということになるのか？

渡したといえなくもない。でも、内容を聞かせなければ意味がないだろう。優太が一生懸命書いたんだから。

「お兄さん、何か声掛けてあげてください。たぶん聞こえてはいるから、病院に着くまで励ますような言葉を。お母さんの生きたいって言う気持ちが一番大事なんですよ」

その言葉で改めて気づかされた。きっとこの日が彼女の最後の日だ。隊員にはもうなす術はない^{すべ}ということか。やはりここを逃すと優太の手紙は母親の手に渡ることはおそらくない。

聞こえている。だったら、内容を伝えればいい。他人の手紙を読むのは気が引けるが緊急事態ということでもいいことにしよう。

「ゆーた君のママ？ 聞こえてる？ ……って聞こえてるんだけどつか。さっきそういつてたもんな。よくわかんないだろうけど聞いて

ね。三年後のゆーた君がさ、貴女に手紙を書いたんだよ。オレはそれを届けにきたの。今、自分で読むのは無理そうだからオレが読むけどいいかな？ いいよね？

お母さんへ

今日はね、お母さんのたんじょうびだからおてがみかくよ。

あのね。ぼく少しおりょうりできるようになったの。

ぐじゃぐじゃってしたたまご、作れるよ。

せんたくものもね、タオルならたためるよ。

おばあちゃんがおしえてくれたんだ。

ぼく元気だよ。お母さんは元気かなあ。てんごくに行けた？ 一人でさびしくない？

ぼくお手伝いもできるようになったから、あんしんしてお空で見えてね。

大すきだよ、お母さん。おたんじょうびおめでとう。

だつてさ

彼方はその手紙を優太の母親に握らせた。それから優太が一生懸命考えてかいたであろう便箋の横線よりも大きい大きさが不揃いの漢字も少ない手紙を思い出しながら車内の天井を見上げる。

（ゆうた君は元気だから安心してねって言いたかったのかなー。それとも誕生日を祝いたかったのか、もっと別のことなのかも。例えば、オレが読まなかった最後の一文。あれは言わなくてもよかったよねー。きつと伝わってるし、言わなくていいことだよ。逆に言ったらママ困っちゃうんじゃないかなあ）

一人うんうんと頷きながら、わざと碎けた物言いであいつつも、表情はいつもの飄々としたものではなく何かに耐えるようにゆがんでいた。

（そうだよ。「ぼくのせいでしんじやってごめんなさい」なんていっちゃ駄目。そう思った分だけ元気に生きればいいんじゃないかなあ）

4（後書き）

またかなり時間が空いたあー。
すみません。

しかもやっぱり彼方さんのキャラが変ですよ。
ぼくの中では彼方さんって

何に対しても無関心ぽく見えるけれど本当は情に厚くて弱い所も多い人ですよ。

まあ、ぜんぜん上手く書けませんでした。
とにかく何とか終わらせられてよかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5938s/>

時空宅配便

2011年6月3日00時07分発行